

エミール・ラスクの『判断論』と西田幾多郎 VI

大熊 治生

倉敷芸術科学大学芸術学部

(2003年9月30日 受理)

承前 (s.62) しかしカテゴリー論理的述語理論に対して、さらに近付いてくるのはカントにおける包括理論の先験的適用である。しかし彼によれば、「判断力」の機能は、感覚的一直観的素材を、カテゴリー的悟性概念の下へ包括するという観点において成立するのであるから、その場合には、諸カテゴリーは先験的述語として現われるのである (註1)。

しかし歴史的にはさらに、なお一歩が進められ、次のことが確認される。それは即ち、ここで企てられたカテゴリー論理的賓述理論が結局は、カテゴリーに対して、根源的な、アリストテレスによって与えられた機能を再び割り当てるといふこと、これである。というのは、アリストテレスに於いては、疑いもなく、カテゴリー的系列の内部で、その他のカテゴリーが実体に対する関係は、述語が主語に対する関係と同じであるとしても、やはり諸カテゴリーは全て、例外なく、*κατηγορούμενα* の地位を、また存在者の述語の、そして最高の、先天的な述語の地位を取るのである (註2)。このように実体と偶有との単なる対立を凌駕することは、次のように——つまり、このような主語と述語との区別に対してはさらに深い説明が加えられるということによって——説明することができる。その時にはまた、最終的には単に相対的な主

註1) Kr.d.r.V.B.170ff, Kr.d.Urt.Einl.IV.しかしまた、カントの普遍的な、純理 B.93f.で暗示された、判断の包括理論は、ここでは厳密に証明されるべきではなかったとしても、最初から先験的論理のこじつけのなかに現われるのである。というのも、カントにしても大体において、概念や判断、そして推論を対象的—先験的相関者に一致させようと努力していたからである、

註2) それに関しては、ポニッツの次の箇所を参照。インデックス 377f, 次に 1.22. 83a 18ff., トレンデレンブルグ 4ff., 19, プレンターノ 102ff., 113ff., シュッペ D.Ar.Kat., 40ff., マイエル IIb. 318ff., アベルト 124ff., 132ff., 138.

語、実体 (*οὐσία*) が、実体的な主語 (*τόδε τι*) と、実体的カテゴリー的述語 (*τι ἐστίν*) とへ分割されるのでなければならない (註1)。(s.63) それ故述語的限定がメタ文法的に把握された段階的構築物である、という理論が明らかになる。カテゴリー的に完全に無規定的な存在者は規定全体に比例した絶対的主語である。実体的に規定された存在者は、その他のカテゴリー的規定に比例した相対的主語である (註2)。分節化の上に、実体と偶有に従って建てられた理論は、しかし、それによって主語と述語という、単に暫定的なそして、相対的な規定の性格を含むであろう。

註1) アベルト143参照。

註2) 二、三のアリストテレス的立場はカテゴリー的に未規定的な、或いは規定可能な存在者を素材と考えるように誘惑する。それで、Met.VI.4.1029.a. 20 ff でまさに、それについて言われているところによれば、その他のカテゴリーは、実体によって資述されるが、このカテゴリーは素材によって資述される、といわれる。それに対しては 1028.b. 36 f. あらゆる資述の基体 (*ἑποκειμένον*) について、と1049.a. 25 (もしも *κατ' ἄλλοῦ* の読み方が正しければ) 参照。それについては、プラントル I.188 註308。それと反対に、シュツペ 19 f., マイヤー IIb. 308/9 註。ストア派における主語としての、性質のない素材という意味での (*ἑποκειμένον*) については、プラントル I.429 f.を見よ。

しかしここで再び思い出されるべきことは、アリストテレスにとっては、対象的一カテゴリー的契機は、メタ論理的性格をもっている、ということである。論理的陳述構成要素を対象的領域の分節化に従って規定することは、コペルニクス以前の解釈にとっては、不適當であるということ、このことが前に述べられたとすれば (上記 s.52 f.を見よ)、今や明らかになってくることは、その分節化によって用いられた手続きが、それでもなお、そこで支配的な認識理論的な根本的見解の精神に反して、事象の力を通して導かれた、ということなのである。ただこのような根拠からのみ、既にカント以前のカテゴリー理論は決定的に論理的構造理論へ入っていくことができる。そして、忘れてならないのは、構造理論に於いては、諸カテゴリーが既に自らの対象性のために、メタ論理的意義をもっており、反対にあらゆる論理的現象は、対象性を最高に反映することができる、ということである。(s.64) カントが初めてカテゴリーを「悟性」形式にし、それを形而上学から論理学へと持ち込んだのである。根底に於いては、アリストテレスのカテゴリー理論とカントのそれとの間の、もっとも深い相違はそこにあるのである。対象のカテゴリーと、論理の形式がカントの前に有るが、しかし、対象的諸カテゴリー自体が、論理的形式として考えられているのではなかった。この視点の下では、カテゴリー理論には統一的展開が欠けている。むしろカントに於いては、カテゴリー理論は、突然 *μετάβασις εἰς ἄλλο γένος* を犯しているのである。カントの意味で論理的と考えられたカテゴリーに対してこそ、初めて正当に述語の論理的使命が割り当てられ得るのである。

既に一度述べたように (上記 s.51/52)、各々のメタ文法的な述語理論の本質の中には、その理論によって認められた構造の原分節化が、心理学的・文法的に分節化される陳述の構成要素を通して、際限なく妨害され、不明瞭にされる、ということが有るのである。まさにそこから明らかになってくるのは、慣習的な主語・述語理論が、普通はただ、真の論理的な構造の切り口を覆い隠すような構成要素の分解を企てる立場にあり、自らの (理論の) 主語と述語でもって、単にその時々、偶然に真の意味の構成要素が覆われてしまうこともあるのだ。それ故持続的に、心理学的・文法的解釈を、メタ文法的理論の言語へと翻訳することが必要である。その際常に重要なことは、各々の実際上の陳述の現状において、カテゴリーと、カテゴリー的素材から成り立っている構成要素の累計を明らかにすることである。このような変形においては、まず第一に、虚構によってカテゴリー的構成要素と素材的なそれとが、図式的に単純化された分割のなかで出会うようにさせられるという操作がなされ得るのである。(s.65) 即ち陳述

要素の複合が、或いは陳述要素の「概念の」性格が、従ってあの、以前 (s.49 f) 述べられた、最終的な複合されていない構成要素へと解消可能であるという問題が、暫定的になお度外視され得るのである。

「aはbとは異なっている」或いは「aはbの原因である」という構造の中では、文法的に定位づけられた理論に従えば、「a」は主語の位置をとり、「bとは異なっており、bの原因である」というのが述語の位置をとる。真のグループ分けは、それにも関わらず素材、即ちaとbを、一面では一緒にし、カテゴリー的形式を、従って因果関係を他面に追いやることを要求する。＜言語的公式化を通して隠されたところの＞論理的意味に従えば、カテゴリー的素材a, bについては、カテゴリー的形式のうちに、或いは相異性または因果性の「関係」のうちに存立することは、それ(カテゴリー素材)に「ふさわしい」と言われる。確かに時には、主語と述語とは、文法的な、真の分節化に従えば一致することもある。それは例えば、以下のような命題である。即ち「aは存在する」「aは妥当する」「aは(自らと)同一である」等である。ここでは偶然に、文法的な述語が、真の述語と、即ち存在、妥当、同一性というカテゴリーと一致している。ここでは事実上、繫辞、判断的総合、判断的關係が、真に繫げられるべき分枝を、つまりカテゴリーとカテゴリー素材とを結合している。このような好都合な特別の場合は、カテゴリーがそこで例外的に關係しているのではない、という事情のおかげなのである(註1)。

註1)「領域的カテゴリー」として。即ち Log.d.Philos, 70 f.を参照。

この場合には、つまり、カテゴリー素材が単一項である場合には、文法化する理論もまた、カテゴリー素材全体を判断の分枝に、主語にするのである。しかしカテゴリーが關係的なものであり、従って、カテゴリー素材が二項分枝である時には、文法的に定位づけられた理論はカテゴリー的関係と、主語、述語を繋いでいる判断的關係とを互いに混和するのが常である。カテゴリー的素材(例えばa, b)の全体ではなくて、カテゴリー關係の一分枝(a)のみがそれを(カテゴリー素材を)主語にし、繫合的総合の分枝にするのである。カテゴリー的關係のもう一つ別の分枝(b)は、それ(カテゴリー素材)を、このカテゴリー自身(例えば、相違、原因)と融合して、結合の第二の關係分枝に、述語にするのである。その際犯された過失は、それ故、カテゴリー的関係と繫合的關係との単純な同一視の内ではなく、カテゴリー的関係と繫合的關係とを部分的に互いに入り乱れて押し動かすことの内存在するのである。実際に、繫合的關係は常にカテゴリー素材とカテゴリー的形式との間で起こる。さてカテゴリー的形式が一つの關係であるならば、それはカテゴリー素材とカテゴリー的関係との間の關係の中に存在する。言語上では真相は常に変形を通じて表現される。その変形に於いては、まさに存在に関わる命題におけると同様に、カテゴリーはまた文法的述語にされるのであり、従って例えば形式化を通して、aとbは因果的關係の中にあるのである。それ故カテゴリーが關係的であるか、またはそうでないかのどちらかであるような様々な場合に於いて、文法的な点で同様に述

語的であるものに対応するのは、論理的な点では何か完全に異なったものである。そしてその際、反対に論理的に同等のものが完全に異なった文法的表現をもっているのである。

文法化する手続きという、この修正の基礎になっているのは、ただあらゆるメタ文法的理論の主要な論拠である。それに従えば、構造的切り口は、仮に一度でも被分節化と被接合化が存在するとすれば、最終的にはただ事象的に重要な相異に従って規定され得るのである。

(s.67) しかしながらもしも我々がたった今、故意に行なわれた図式的な単純化をそのままにしておくとするれば、この述語理論の全体が暫定的になお最も単純な抗議に対して無防備に曝されている。即ちもし我々がまた、ここで提出された要求に従いつつ、理論的組織構造の混乱を、その形式的、素材の構成要素に従って解決しようとするならば、現実的陳述の現状の中に正しい道を見出すことは全くできないであろう。というのは、行なわれた分析に従って、真の原構成要素が、以前に容認されたのと同じ程単純に配列された配置の中で見つけだされることは、決してないからである。(上の例での a のような) 文法的な主語は決して単にカテゴリー的に関係のない素材を含んでいることは決してない。それ故まず第一にカテゴリーとカテゴリー素材による分類が、実際上の状態を処理するためには全く十分ではない、という外観が生じなければならない。

そこで更に、最後の疑念を除去するためには、以前 (s.49 f) 論じられた複合的組織構造が、その最も単純な構成要素にまで分解可能である、ということが加わらねばならない。というのは、暫定的になお存在する、事実的な陳述組織の支配不可能性は、次のことの内に根拠を持つからである。それは、我々が、カテゴリーとカテゴリー素材とへ分解を試みる際に、確かに孤立化可能な述語に、そして一つの側面がもたらされるカテゴリー的述語に突き当たるのであるが、しかし同様に孤立化され得る原主語とか、単にカテゴリー的に関わりのない素材に突き当たることは決してないのだ、ということである。論理的に裸の素材の代わりに、むしろ特別の陳述構成要素として、唯「概念」が見出だされる。しかしこの事情が意味するのは、まさにこの「概念」に、また理解されたものとして基礎になっているものに、そしてこの、かつての陳述の確実になった産物に対して、(s.68) 以前に一般に論究された分解の傾向に従って、陳述の組織構造に対してするのと同様に、この分離を、即ち、カテゴリーとカテゴリー素材への分解を適用せよという要請以外のなものでもない。

もしも首尾一貫した分解理論の立場に立つならば、我々は陳述の現状においては、決して単なるカテゴリーには関わりのない素材が見出だされることはない、という事実の中に最後には再び唯、単に心理学的一文法的問題のみを見出だすことができるだけである。その理論は一見して最も原始的な、しかも素材的な原主観について述語する陳述が、その明確な実行の中で、ではなく、むしろ常に唯、完結性と「被包括性」の状態に於いてのみ見出だされる>というように解釈されるように見える。というのも一般にこの「概念」の中に、然り、この概念の中にカテゴリーに関わらない、従って「把握された」素材が潜んでいる限りにおいて、諸賓述が探求されるということは疑いのないことだからである。しかしながらやはり、とにかくこ

には一つの素材が、即ちそれに対して何か或る、カテゴリー的規定が課せられる素材が存在するのである。もしも、このような最小限のカテゴリー的形式でもって、既に囲まれた素材を原概念として示すとすれば、次のように言うことができる。即ち、陳述要素として作用するのは決して単なる素材的断片ではなくて、少なくとも常に、原的概念なのである、と。従って単なる素材が主語の役割をもって現われることは不可能である、ということを確認するためには、我々は例として合成された物概念、或いは出来事概念を援用することはできない。というのは、ここで概念の段階の中に凝縮されて存在するものは、相変わらず陳述の系列の中に解消させられるからである。むしろ我々は最も単純な、もはや全くカテゴリーを含んでいない、そして純粋な素材を表す内容まで戻り、根源的主語の純粋な場合を、例えば「赤がある（赤が存在する）」とか「雷が鳴る（雷が起こる）」等という命題を通して指示され得るような、純粋な場合を構成することを試みなければならない。(s.69) その時には、このような場合について、次のことが洞察される。即ち、それが論理的に裸の感覚的・直観的な印象素材を主語として提示しない限り、むしろこの極端な場合に於いても、ここでは確かに厳密に詳論されていないが、主語に於いて、根源的素材が、既になんらかの仕方でカテゴリーによって包まれて存在するということ、そして常に何かある論理的形式が、その際前に進み出てくるということ、これである。

ところでこの事態全体は認められるが、しかし、ここで主張された賓述の理論は少しも動揺しない。確かに今や、まず単に次のような関係が、つまり陳述の組織の中では決して素材的根源的主語ではなくて、せいぜい根源的概念が現われるだけであるならば、それが単に心理学的・文法的重要性を持つような関係がより正確に規定されるであろう。事柄から言っても、既に根源概念が成立することは認識の賓述行為として考えられるべきなのである。もしも我々が根源概念の存立を、例えば単に印象的な感覚的体験の際に存在するものと比べるとすれば、それは既に論理的賓述機能の産物であることが証明される。ひょっとすると我々は、くあらゆる陳述が、現実の心理学的・文法的段階に於いて、常に既に、非概念的賓述という固定された産物を基礎として前提している>ということを確認するように強要されるかもしれない。

しかしどんな意味での基礎としてか？ 根源概念的組織構造は正しく解釈された陳述の現状態における主語として、従ってそこでカテゴリー的述語を通して要求された相関者としてみなされるべきであろうか？ この問いを投げ掛ける際に直ちに気づかれることは、この解釈が不適當であろうということである。陳述の現状態の中で、述語として現われてくるカテゴリーが、カテゴリーとして要求するのは、それが自らの形式性において一義的に疑いなく指示するもの、つまり一つの素材であり、素材以外のなものでもないのである。根源概念全体とか、根源概念的 (s.70) 形式-素材-組織構造の全体ではなくて、その概念における単なる素材的現状態が、陳述の組織構造の中でカテゴリーの主語を表すことができる。それ故根源的概念の中に含まれている素材が、二つの側面にむかって主語として働くということ以外の態度をとることは全くできないのである。もっと厳密に言えば、根源的概念の素材的現状態において、一定の要素が一つのカテゴリーの割り当てに対して決定的に作用し、またある要素は他のカテゴリーの

割り当てに対して決定的に作用する。従って根源概念的な形式－素材－組織構造は決して現実的陳述組織の述語に対する主語とはならないのである。むしろ二つの陳述組織構造が存在するのである。その一つは被包含の状態においてであり、もう一つは現実性においてである。両者の素材的主語から根源的概念の相対的素材が構成される。従ってそれは全体として、一方に或いは他方に余剰の部分を示す。カテゴリーからみれば、二つのカテゴリーのそれぞれが競合するカテゴリーにはかまわずに、素材を目指しているのだ、ということが明らかになる。

ここで根源的概念によって作り上げられたものは、一般的には概念的、カテゴリー的に既に形成された全ての陳述要素に妥当する。それ故同じ事情が暗示的に、何かある、より複合的な場合に証明され得る。つまりこれに対しては、例えば因果的組織構造において因果関係を差し引けば、そこに残っているのは、単なる素材的断片ではなくて、せいぜい「概念」、物と出来事、従ってそれらの側で、それ自体既にカテゴリーの刻印を受けた存在態である。さてこれに反して、素材 a, b は自らのその他の即ち「概念的」－カテゴリー的な、(s.71) つまり何か物的な包囲にも関わらず直接的に因果的カテゴリーによって捕らえられるのである。そしてこれに反して、この素材に於いては一定の契機に対して物のカテゴリーが、またある他の契機に対しては因果的カテゴリーが「ふさわしい」であろう。因果的カテゴリーはいわば、a と b という概念の中にある、物象性というカテゴリー的覆いを通して把握され、a－素材、b－素材においては、唯その因果的素材が因果的に結合されるのである。素材と、それ故因果的カテゴリーの構造的相関者は、それに対して既に「概念的に」形成された原素材ではなく、感覚的に直観的な原素材を与えることができるだけである。

それ故全く一般的に言えば、あらゆる考えられる限りの、その他の「概念的」カテゴリー的な刻印を与えられたものがあるにも関わらず、常に一定の、単なる素材と一定のカテゴリーとがあるのである。そしてそのカテゴリーとは、いわば前景に在り、現実的陳述の個々の場合に、連繋がそれのみを目指すところのものなのである。各々の陳述において認識諸対象の一部分は既に「把握された」ものとして前提される。即ち理論的な全課題によって、それ故、素材のカテゴリー的克服によって既に行なわれた何かあるものであると考えられるのである。各々の陳述は、この成果に関連し、一層の貢献を通して認識の仕事を進めようと試みるのである。陳述が<為されたこと>を出発点として、また下部構造として、それ故主語としてみなし、理論的作業の継続を述語として考えるということは、心理学的－文法的賓述理論のより深い意味なのである。

ここでは、素材の規定性が、カテゴリー的形式の一定の成層化や、階段構造とかを、実体と偶有への分類という範型に従って受け入れることを、ひょっとすると要求するのではないか、などということが研究されるべきではない。というのもその範型とは、それに従えば例えば因果関係が、例えば物的関係を、内容に従って前提するようなものだからである。(s.72) このような上部構造の存立は、いずれにしてもここで主張された基本的見解を転倒させることはないであろう。カテゴリーを把握し、素材にまで達することは確実なままであり、その時にはそれ

は事象的に規定された秩序に従ってのみ起こるのであろう。

それ故またより複雑な、事実上の陳述組織の事情も、ここで立てられた賓述理論から統一的に克服されるであろう。単なる形式や、単なる素材から成立しているのではないもの、その中に、何らかの仕方で形式-素材-組織構造が、投入されるのである。それによって、陳述の組織構造が各々の点で賓語の二つの分枝へと分解され得るものとして明らかにされるのである。文法化する理論に対しては、この概念の解釈は諸要素の事象的分解がするのと同じく、遠くに隔たって存在しなければならないであろう。より複雑な分枝から、まさに二つの根源的分枝へと遡るべきであるということ、このことはその理論の視界には入ってこられないであろう。

このメタ文法的賓述理論を通して、判断と概念との間の境界は取り払われるだけでなく、その両者の中に、一様に含まれている形成物が最後に成立するのはどこに於いてであるか、ということも探求されるのである（註1）。

註1) この、メタ文法的な陳述理論が完全に形成されたあとで、後から二、三の論理学者におけるその理論の痕跡が、全く偶然の、散乱した形で発見された。それは、かつてシュッペによって次のように言われている。「本来的論理的意味に於いては所与が主語であり、述語とはその所与を互いに他に対して、自らに固有の関係の中に置くような概念なのである。即ちその関係とは、同一であるとか、異なっているとか、或いは因果的に結び付けられているといった、獲得の仕方を形づくっているところの、まさにその関係なのであり、即ち本来の意味でのカテゴリーなのである。言語はこの事情を表現したのではなく、このように結び付けられた二つのものの内の一つが主語であり、もう一つが述語であることを許すのである。・・・Erkth.Log., 98. しかし彼の場合には、その上に立てられた述語理論に至ることはない。(s.73 註続き) 概念と判断を平均化することに際しては、規定されていないものを論理的に規定する、という同じ原的作用が両者の内に潜んでいる、ということを実トルプは暗示した。Grundlag.d.exakt.Wftn.II.Kap., §2-4, bes.40f., 47, Philos.Propad 1909, 13., Philos., 50f.; を参照。ナトルプについては上記 s.49 註を参照。この述語理論でもって、原始的な、また「基体」として作用する述語形成物の被編入的存在の理論を、判断の組織構造全体の中へ結びつけることに対する発端は、個々別々に見出だされる。それ故シュライエルマッハーも次のような見解を主張する。それは「原始的判断」に於いては、直接的に「本源のカオス」が「有機的傾向を惹起する限りにおいて」彼が他の場合にも「素材」とか「質料」と呼んだものは (Dialektik, Beilage E XXIV ff., §185 ff. 参照。) 主語である。彼は最も単純な、非人称的なものの中にそれへの接近を見ている。(Dial. §304 ff. Ann., Beil. E XXIV ff 参照。) 大体に於いてシュライエルマッハーは認識の行為を、カオスを論理的に規定することの中において (Dial. §108 ff., Beil. E XXIV ff 参照。) そして概念と判断の同質性をこの原的行為の中で認識するのである (上記 s.49 註参照)。シュライエルマッハーと同じくトレンデレンブルクも、L.U.II, 231ff. 非人称的なものの中で、判断の原形式と「更なる形式の萌芽」を見出だしている。この「最初の活動」の「固定化」から成立するのが実体概念である。現在では、とくにマイヤーが「判断の最も原始的な活動」にまで遡っている。それは「それ自体としては、自らの主語の中で既に成し逃げられた認識表象を前提して」いない活動である。マイヤーに於いてはテキストの中で主張された、次のような見解が見出だされる。それは即ち「要素的判断」は「文法的、規範的命題のなかで、表現されるのではない」し、「独立的に現われる」のではない、ということ、それに反して、「基礎判断」において実現されたものとして、前提されて考えられるべきであり、それ故この判断の中で、区別されるべきなのは「基体を形作る判断と、この基礎の上に生じる主要な判断」との間においてである。それは実際、要素的判断の主語として、素材を、客観化された「表象の内容」を考える、という結論へと至ることになるのである。「いずれにせよ、要素的判断作用においては、まさに把握される

べき表象の内容が、たしかに論理的主語として考えられている」(163)。マイヤーは、そこから一面的に「基体判断」に適合させて主語と述語とに分離することを拒否するに至るのである。結局、彼がこの説明と結びつけたのは、カントの範疇論を判断理論へと合体させることであり、また彼はそれに応じて判断の行為をカテゴリー的装置を通しての客体化として確認するのである。情緒的思惟の心理学 1908, 147ff., 163ff., 170ff., 373ff.。最後に次のことが参照されるべきである。即ちリッケルトの論文「一者、一性、一」Logos1911,48, で見出だされる発言は、<述語によって形式が、主語によって内容が理解されるべきだ>ということであり、また<各々の文法上の主語の中には、既に形式と内容との結合が潜んでいる>ということである。

ラスクの思索はこの箇所、いわば一種の「未整理の」領域へ踏み込むことになる。それは繰り返し現われる「原」とか「根源的」という概念で表される領域である。ラスクはそれを「根源的素材」と「根源的概念」という対立する二項の関係で分析しようとしているようである。しかしこのような根源的素材や根源的概念というものも、人間の「意識」を離れては考えられない。むしろそれは「意識の事実」、「意識の働く様相」と考えるべきであろう。前回の最後の部分で、我々は「主語」が「下位のもの」「非合理的なもの」とされ、「述語」が「論理的なもの」「合理的なもの」とされているのを見た。これはもちろん、アリストテレスの論理学に倣ったものであるが、ラスクのこのような「根源的素材」「根源的概念」というような意識の段階においては「主語について述語する」という関係、或いは「非合理的なものを合理化する」という意識の機能があるのみで、そこでは意識は唯「存在する」という状態、「意識が意識を意識する」という、いわば「根源的体験」の状態にあるのではないだろうか。そしてこの「意識される意識」と「意識する意識」という意識作用の分化こそが、西田の「働くもの」と「見るもの」の概念へとつながるものなのである。

“Die Lehre von Urteil” (The theory of judgement) by Emil Lask and the philosophy of K.Nishida (VI)

Haruo OHKUMA

College of Arts

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 30, 2003)

The thinking of E.Lask enters into the region, which cannot be said well-orderd. In this part, one of the most important concept is “Ur-(G)”, which means in English “original” or “basic”. He tries to analyse this region by the opposing pair of concept, “original material” and “original concept”. And these concepts cannot be thought apart from the conciousness of humen being. So these two concept should be thought as “a fact of conciousness” and “a aspect of conciousness”. Last time we have seen “subject” prescribed as “subordinate” or “irrational”, and “predicate” as “logical” or “rational”. This way of thinking, of cours, follows the Logic of Aristotle’s. But in the “original” or “basic” region, Subject and Predicate are not yet articulated, and there, only conciousness exists, and conciousness is concious of conciousness. This is the original experience of conciousness. There begins the differentiation of experience into “material” and “concept”. Nishida has developped these concepts into his concepts, “the working” and “the seeing”.